

## ウル第三王朝時代ウンマにおけるアマルシン王の神殿

前 田 徹

### はじめに

ウル第三王朝第2代の王シュルギは、「彼の愛する家エフルサグ é-hur-sag」を王都ウルに建てた (RIME 3/2, Shulgi 3)。王宮エフルサグの所在は発掘によって確認されている (Moorey 1982)。第4代の王シュシンも、「彼の愛する家」を建てた (RIME 3/2, Shu-Sin 19)。彼の碑文には彼が建てた「家」の名を記さないが、碑文の出土状況からウルにあるゲバル gi<sub>6</sub>-par<sub>4</sub>であると考えられ、シュルギ以来の王宮であったエフルサグからナンナ神殿に近いゲバルに王宮を移したと推定されている (RIME 3/2, 329-330)。

王都ウルにある王宮＝神たる王の神殿は、ウルの廷臣・将軍が援助したにしても王が建てたのであるが、支配下諸都市に建てられた神たる王の神殿は、在地の支配者（エンシ）が責任を持って造営した。都市のエンシが神たる王のために神殿を建てた例は、アダブ、エシュヌナ、それにラガシュにある (RIME3/2, Shu-Sin 11～13)。ともに、第4代の王シュシンの「家」＝神殿である。エシュヌナにあるシュシン神殿は、発掘によって確認されている (Frankfort 1940)。

シュルギ神殿が、シュメール都市ラガシュやウンマに複数のあったことは、行政経済文書によって確認される (前川1998, Mackawa 1999, Gelb 1976)。ウンマ文書によると、ウンマには少なくとも3箇所にシュルギ神殿があった。ウンマ市区、キアン市区、市区は不明ながらアンズバッバルのシュルギ (<sup>d</sup>šul-gi anzu<sup>mušen</sup>-bar<sub>11</sub>-bar<sub>11</sub>) とされる神殿である<sup>(1)</sup>。

1) ウンマ市区のシュルギ: YOS 4, 260; AAICAB I, 4, 504; SAKA 97.

2) キアン市区のシュルギ神殿: YOS 4, 260; TCL 5, 5672; MVN 8, 243.

キアン市区のシュルギ神: YOS 4, 260; MVN 4, 147; TCL 5, 5671; TCL 5, 5667; TCNSU 550; UTI 3, 2132.

キアン市区に（坐す）守護神たるシュルギ神 <sup>d</sup>lama-<sup>d</sup>šul-gi ki-an<sup>ki</sup>: AAICAB, 1911-186.

3) アンズバッバルのシュルギ <sup>d</sup>šul-gi anzu<sup>mušen</sup>-babbar: MVN 4, 122.

シュルギ神殿がウンマ文書に記録される最古の年は、シュルギ31年である (CCTB 2, 215)。シュルギ45年の文書に「神たるシュルギが彼の新しい神殿に入った <sup>d</sup>šul-gi é-gibil-na ku<sub>4</sub>-ra」 (TCL 5, 5667; TCL 5, 5671) という記述があり、新神殿が造営されたことが知られる。新しい神殿に対する「古い神殿 é-<sup>d</sup>šul-gi-ra-sumun」という表現はアマルシン1年にある (Owen, JCS 52, 60)。

ウンマにおいて王の神殿を建てることは、第3代アマルシンのそれが比較的多くの文書を残すが、最初にシュルギ神殿の造営を、その後にアマルシン神殿の建立についてウンマ文書を検討する。神殿の建設に関わって為された作業種目も重要であるが、神殿建設がどのような体制で為されたのかに焦点を絞り、関わる人物についてその特定を出来る限り試みたい<sup>(2)</sup>。ついで、アマルシン神殿の組織について考えることにする。

## I. シュルギ神殿の造営

シュルギ45年にシュルギ神が新しい神殿に入ったことを記録するウンマ文書は次のような内容である。「2頭の牛、シュルギ神が新神殿にはいった（とき）。2頭の穀肥牛、1頭の死した牛、シュルギ神の酒宴。1頭の牛、キアン市区のシュルギ神の酒宴」(TCL 5, 5671, iv 19-23 = TCL 5, 5667 i 8-11)

この文書では、シュルギ神の酒宴用と、キアン市区のシュルギ神の酒宴用の牛を並べて記す。新神殿での宴が「シュルギ神の宴」であるから、それとは別にキアン市区のシュルギ神殿があったことになり、新しいシュルギ神殿はキアン市区以外、つまり、ウンマ市区に建てられたと考えられる。シュルギ神が神殿の玉座に納まることで新神殿は神殿として機能し始めるのであるから、シュルギ神がシュルギ神殿に入ったシュルギ45年の1年前の44年に作業は終わっていたと考えられる。

シュルギ神が新神殿に入ったことに呼応して、シュルギ36年から41年にかけての文書に、シュルギ神殿造営関連記事がある。一般に神殿造営は、基壇造りから始まり、鎮壇具を埋めてのちに、神殿本体の造営に取りかかる。

シュルギ新神殿の基壇造りはシュルギ40年である。この年に「シュルギ神殿の基壇を築くために2枚の皮革」が支出された(2 kuš uš é-<sup>d</sup>šul-gi-ra-ka ki-gá-ra: TCL 5, 5672)。Aleppo 156は、シュルギ39年に25個のかご、シュルギ40年に20個のかごを、「シュルギ神殿を建てるために」、ウルタルルフからグダ神官のルガルアジダが受領したことを記録する。支出者ウルタルルフは林管理人である(Steinkeller 1987a)。グダ神官のルガルアジダは、キアン市区のシャラ神殿に属するグダ神官に同名の者がおり、同一人物であると考えられる<sup>(3)</sup>。しかし、シュルギの新神殿はキアン市区でなくウンマ市区にあったと考えられ、彼がどのような資格で、シュルギ神殿建設のかごを受領したかは不明である。シュルギ40年には、1,200個のかごがシュルギ神殿で使われた<sup>(4)</sup>。シュルギ40年の文書に記録された20個や1,200個のかごは、基壇を築く土木作業に使用されたと思われる。同じシュルギ40年には、シュルギ神殿を建てるために、ある種の壺が支出された<sup>(5)</sup>。

シュルギ40年以前にもシュルギ神殿の工事記録がある。シュルギ36年には、シュルギ神殿での煉瓦仕事などに従事する者の記録がある。「800サル(面積)の煉瓦、その仕事は(1サルについて)1/2人。(計)825人、その賃金は(1人1日につき)7シラ(の大麦)。シュルギ神殿の仕事。

ギルは建築師のウルニギンガル」(YOS 4, 273)<sup>(6)</sup>。この年の煉瓦工事は、新神殿本体の建築でなく、既に建っているシュルギ神殿の修復工事と考えられる。

シュルギ45年にシュルギが入ることで祝った新神殿の工事着工は、シュルギ36年でなく、39年頃であったと考えられる。約6年をかけた工事である。

なお、ギルの任務を担う建築師のウルニギンガルと同一人物と思える建築師のウルニギンガルが、シュルギ25年に、ウルク市においてニントウルトゥルの家の建築に従事する(NCT 48)。ニントウルトゥルは、ウルの王女もしくはウンマのエンシの縁に繋がる高位の者と考えられるが、特定できない<sup>(7)</sup>。ウンマの建築師が他都市のウルクで仕事をする。ウルの王権は物的資源だけでなく、人的資源をも有効に活用する一つの方策として行った。

シュルギ40年に基壇が造られた後、シュルギ41年の文書AAS 18がシュルギ神殿の建設に従事する者を記録するが、その集団の長の名は不鮮明であり、どのような労働集団であったかについても確定的なことは何も言えない<sup>(8)</sup>。さらに、シュルギ44年に竣工式が行われたかもしれないが史料から確認することは出来ない。

## II. アマルシン神殿の造営

ウンマでは、シュルギのための新神殿がシュルギ治世末に建てられたのに続いて、アマルシン治世にアマルシンの神殿が造営された。アマルシン神殿の建設はアマルシン5年に始まったと推定できる。関連する文書を見たい。

ウンマ文書の中でアマルシンの神殿に言及する最も早い文書の一つが、アマルシン5年6月のUTI 6, 3712である。この文書は、「アマルシン神殿の高められた(囲)壁のためのシスクル祭儀 *sískur bàd-è-da é <<sup>dd</sup>suen-<sup>sè</sup>*」用に、各種の穀粉とビールが、ウルシュルパエから支出されたことを記録する。受領もしくは確認の捺印はエンシである<sup>(9)</sup>。神殿建立に際して神殿敷地を清浄にするための儀式が行われたことは、古くは初期王朝時代ラガシュの王ウルナンシュの碑文(RIME 1 ABW 1, Urn. 49)、ウル第三王朝時代直前のラガシュの支配者グデアのニンギルス神殿建立碑文によって知られる(RIME 3/I. Gudea Cyl.A)。文書には単に壁(*bād<sub>3</sub>*)とあるが、アマルシン神殿の壁とは神殿を建てる敷地を囲んで浄め、そこに基壇を築いて神殿を建てるにふさわしい地とするためのものであろう。

同じアマルシン5年6月に、シュルギとアマルシンの名で各々1頭の羊を都市神シャラの定期支給の増加分として奉納する記録がある(BPOA 7, 2043)。神殿造営に係わる奉納かもしれない。

アマルシン5年12月に、ウンマのエンシは、ニップルにおいて守護神たるアマルシンにシスクル(*sískur<sup>d</sup>lama-<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen, ša nibru<sup>ki</sup>*)として奉納された羊について、確認の印章を捺す(Or 47/49, 345)。神たる王へのシスクルに、ウンマのエンシが関わるのはこの1例のみである。この時期、ウンマにおいてアマルシンの神殿の建設が始まったと考えられるので、それと関連すると

思われる。

翌アマルシン 6 年になると多くの労働記録がある。AAICAB 1 1924-665 は、労働集団のアマルシン 6 年 1 年間の集計表 (<níg-šID-ak> lú-sig<sub>5</sub> ugula) であるが、そのなかに、「13 人の労働者 27 日間、その労働は 351 日、アマルシン神殿の造営に従事 é-dím<sup>d</sup> amar<sup>d</sup>-suen-ka gub-ba、一、捺印はヌバンダ職のアカルラ」という記録がある。捺印するヌバンダ職のアカルラは、ウンマのエンシー族であり、アマルシン 8 年に彼自身がエンシに就任する。

SETUA 71 は、「アマルシン神殿に従事する賃雇いの仕事 á lú-hun-gá, é<sup>d</sup> amar<sup>d</sup>-suen-ka gub-ba」  
として、8 集団が計 271 1/6 日働いた記録である。労働者には 1 人当たり 1 日 6 シラの大麦が支給された。合計では 5 グル 127 シラになる (še-bi 5.2.0.7 silà gur)。これらの労働集団の長は、文書管理人 (彼の名は記されていない)、ウルニギンガル、ビドゥガ、アグ、ルトゥルトゥル、ルニンシュブル、アカルラ、カスである。捺印者は書かれていない。

この労働記録に関連すると思われる大麦支給記録がある。ŠA XCIX: 132 は、アマルシン 6 年 6 月の日付があり、「1 グルの大麦、賃雇いの賃金、アマルシン神殿へ、(倉庫長) イルから、捺印は文書管理人のウルシャラ」とある。文書管理人は先の労働文書で、労働者集団の長として現れる。彼らに支払われる大麦は、一人 6 シラであるので、計 1 グル 77 シラになる。大麦支給記録では 1 グルとあり、近似した大麦量である。つまり、労働記録において集団の長とある者は、賃金を自ら負担するのではなく、倉庫長イルから支出された大麦を使用したと考えられる。ŠA XCIX: 132 にアマルシン神殿建設に働く労働者の長として記録されたのが、どのような人々であったかを検証したい。

この文書の筆頭に挙がる文書管理人は名を記載されないが、関連文書から確認されるようにウルシャラであり、彼はウンマの文書管理全般を統括する重要な役職にあった (前田 2000b)。

ビドゥガとルトゥルトゥルの二人は、ウンマ市区のビール醸造人の長 (ugula lú-šem) に同名の者がおり (SNS 376)、同一人物であると考えて間違いない。この二人は、アマルシン 6 年 8 月に「エンシの家を建てるために é énsi dù-dè」、葦束を納めている (MVN 3, 361)。

アグについては、木製品の管理を担うガシャン gašam 職にアグなる者がおり (TCL 5, 6036)、アグとは彼のことであろう。また、カスも、犠牲家畜の管理者 (kuš<sub>7</sub>) であるカスなる者がおり、頻繁にウンマ文書に記録されている。彼のことに間違いない。

ウルニギンガル、ルニンシュブル、アカルラの 3 人については同名異人が多く同定が困難であるが、ウルニギンガルについては、アマルシン神のグダ神官として同名の者がおり (PIOL 19, 367)、彼かもしれない。ルニンシュブルについては、シャラ神のシャブラであるシェシュカルの子として同名人物がおり、この時期に活躍しているので、彼が労働者の長になったのかもしれない。アカルラについては、エンシー族の一人で、後に支配者となるアカルラの可能性があるが、断定は出来ない。

アマルシン神殿造営に働く労働者集団の8人の長の中で特定できるのは、文書管理人ウルシャラ、ビール醸造人の長ビドゥガとルトゥルトゥル、木製品の管理責任者アグ、犠牲家畜の管理責任者カスの5人である。彼らは、ウンマの行政経済組織の中で重要な役職を果たす者達である。このような役職者が、アマルシン神殿の造営において現場責任者として現れる。アマルシン神殿造営はウンマの行政経済組織挙げての仕事であった。

アマルシン6年には、女労働者もアマルシン神殿造営に従事した。一つはルガルエマフエを長とする「25人の女労働者、アマルシン神殿（の造営に）従事」し（UTI 3, 2167）、もう一つはウルニントゥを長とする「147人の女労働者、アマルシン神殿（の造営に）従事」している（MVN 5, 57）。ルガルエマフエは、製粉所に働く女労働者の長（ugula-kikkin）であり、ウルニントゥは、織物工房と製粉工房両方に関与する女労働者の長である。この2文書はともに、ギルの役割をダダガが果たしており、エンシの捺印がある。ダダガは、シュシン治世末年からウンマのエンシになるグドゥドゥの子であり、エンシー族である。

ウルニントゥを長とする女労働者については、アマルシン6年の別の文書PIOL 19, 138にも記録がある。「285労働日の女労働者、ウルニントゥ（の集団）から、アマルシン神殿を造るためにé<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen-ka dù-a。エンシの捺印文書」という内容である。製粉所や織物工房で働く女工が多く神殿造営に駆り出されたのである。捺印者はエンシである。

アマルシン6年6月の日付がある穀物の支出文書BIN 5, 48の1項目に、「アマルシン神殿の据えられた基壇（uš-ki-gá-ra é<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen-ka）のための20シラのエンメル麦」がある。捺印者はウルシュルパエである。この月に神殿の基壇整備の作業が完了したのである。

1ヶ月後の7月にアマルシン神殿の煉瓦積み工事（al-tar）が行われた（MVN 13, 760）。二回の工事が記録され、一度目は、36人のlú-da（側に立つ人？）と216人のlú-dusu（かごを持つ人）が働き、一人あたり1/2シラのビールと1/2シラのパンが支給され、集団全体には1グのゴマ油、30シラの魚が与えられた。二度目は、1度目より多く45人のlú-da（側に立つ人？）と263人のlú-dusu（かごを持つ人）が働き、一人あたり1/2シラのビールと、1度目より少ない1/3シラのパンが支給され、集団全体には1度目と同量の1グのゴマ油、30シラの魚が与えられた<sup>(10)</sup>。

この文書はエンシの捺印文書である。しかし、労働集団の長の名を記さない。エンシ自身が労働集団を率いたのかもしれない。ウンマの7月の月名は、アマルシン6年に「min-ěšの月」から「アマルシンの祭の月」に変更しているが<sup>(11)</sup>、この文書では、旧月名min-ěšを使用している。アマルシン神殿の造営に関わる内容であるのに「アマルシンの祭の月」を使わない理由は不明である。

次の8月には「アマルシン神殿を建てる建築師への手当 šà-gal šidím é<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen-ka dù-a」として、ビールとパンが支給される。受給者は15人である。彼らが受領するビールとパンの量は、先の煉瓦積み労働者一人あたりの量の10倍以上である。これは、10日間とか8日間の支給合計かもしれない。そうであっても、1日当たり1シラから2シラのビールとパンを支給されたことになり、



煉瓦積みの労働者の数倍の支給を受けていたことになる。この文書もエンシの捺印文書である。

以上のようにアマルシン6年6月に基壇が整備され、7月に煉瓦積み作業が始まっているのは確実であり、アマルシン神殿の建築作業も最終過程をむかえた。なお、アマルシン6年最後の月である閏13月に、アマルシン神殿から土砂を運び出す作業が行われている（PIOL 19,268）。

翌アマルシン7年7月になると、「聖所に坐ったアマルシン神」(<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen bára-ga tuš-a)への奉納が記録される（SANTAG 6,176）。アマルシン神殿の建設は終了し、「アマルシンの祭の月」である7月に、神たる王が神殿に入ったのである。

この文書は月名を「アマルシンの祭の月」で書く。アマルシンが新神殿の聖所を御座所としたとき、ザムの祭の追加分として、シャラ神殿に1頭のメス羊、ニンウルラ神殿に同じく1頭のメス羊、アウダに7頭の穀肥羊、そして、破損して読めないが、ある聖所に3匹の穀肥羊と2匹の穀肥山羊が奉納された。ザム（zà-mu）の祭のザムとは、字義通りでは1年の端までの意味であるが、祭儀に関しては、月の満ち欠けに沿う月毎の祭に対して、月名になっている祭を毎年繰り返す祭である（前田2004）。この文書では、月名にあるように「アマルシンの祭」のための定例に従った奉納に加えて、追加分として、ウンマの都市神シャラとその配偶神ニンウルラ神に家畜が奉納され、さらに別の聖所2ヶ所にも奉納された。支出は犠牲家畜の飼育人アルルからであるが、受領捺印者の名は書かれていない。

この7月には、アマルシンの宴用に穀肥牛が支出された（SANTAG 6, 178）。この文書も月名を「アマルシンの祭の月」で書く。支出者は犠牲家畜の飼育人カスであり、エンシが捺印する。

商人ウルドゥムジの同年の会計簿によれば、アマルシンの沐浴（a-tu<sub>5</sub>-a）用にアルカリをアカルラが受領している（Snell, LP 10）。このアカルラとは、銀をはじめとした物品の管理の責任者であって、後にエンシとなる者のことである。アマルシンの沐浴は、アマルシンの宴と関係すると思われる。

商人ウルドゥムジの会計簿は、アマルシンに関して別の事項も記録する。一つは、アスファルトの支出で、「アマルシン神殿の建てられた家の木製くぎを塗るため」である（Snell, LP 10, Rev. iv 28-v 1）<sup>(12)</sup>。木製くぎは神殿内の装飾用であろう。商人ウルドゥムジは別の商人パッダとシャルマフの妻とともに、木材（<sup>gis</sup>ù-suh<sub>5</sub>）を「アマルシン神殿の門のために、é-mašに入れた<sup>gis</sup>ig é-<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen-ka é-maš-a ku<sub>4</sub>-ra」（BPOA 6, 1323 [AS 6]）。

商人ウルドゥムジの会計簿に、もう一つ、「守護神たるアマルシンの舟のために」アスファルトを支出する記録があり、造船関係の部局に属するルガルニルガルが受領する（Snell, LP 10 Rev. iv 9-12）。

神や王、そして都市支配者は、マグル（má-gur<sub>8</sub>）という特別な形態を持った舟を使用した。アマルシンの御座船であるマグル船はアマルシン6年のウンマ文書に初めて現れる（BCT 2, 131）。神殿造営と並行して、神たるアマルシンの舟を建造したのである。商人ウルドゥムジの会

計簿では、単に舟 (má) と書かれているが、マグル má-gur<sub>8</sub> の省略形であろう。

アマルシン7年に、新神殿の完成と、新しく設定された「アマルシンの祭」を祝った祭儀が行われたのであり、見方を変えれば、ウンマにアマルシンの神殿が造られることを記念して、基壇が完成したアマルシン6年に新しい月名「アマルシンの祭の月」のウンマへの導入が図られた。

このように、ウンマにおけるアマルシン神殿の建設は、遅くともアマルシン5年に始まっており、6年6月に基壇が完成し、アマルシン7年7月に神を新神殿に迎える祝いがあった。

この間、建設作業は上はエンシから下は女労働者まで、広くウンマ各層の者が関与した。物品も、ウンマにおける諸物資の管理人であるウルシュルパエからの支出が目立ち、この点でもウンマが総力を挙げてアマルシンのために神殿建設を遂行したことが知られる。ウンマにおいては、神としてアマルシンを祭る神殿と、祭の月が設定され、神たる王アマルシンはウンマでは重要な意味を持って遇されたと考えられる。

### Ⅲ. アマルシン神殿の所属員組織

アマルシン神殿を維持する組織も整備された。AAICAB I, 2, 1971-371 は、「守護神たるアマルシンの所属員組織 gir-sè-ga<sup>d</sup> lama<sup>d</sup> amar<sup>d</sup> suen-ka」の人員構成を記録する。この文書は、神殿建設が始まったと思われるアマルシン5年より前の4年9月の日付がある。ウンマ文書において神たるアマルシンの名が記されるのはアマルシン4年からであり、この文書はその最も早い時期の文書である。アマルシンの王冠用の金の購入記録がこの年にあるので (TCL 5, 6046)、アマルシン4年から、アマルシンを祭る神殿が計画もしくは着工され、それを維持する人的組織が作られはじめたのである。

AAICAB I, 2, 1971-371に記された所属員は以下のようにになっている。

2人のグダ神官、2人の料理人とパン造り人、2人のビール醸造人、3人の漁師、1人の鳥追い、1人の草運び人、1人の陶工、1人のミルク運び人、1人の穀肥羊の牧夫、1人の蛇つかい、1人の前庭清掃人、1人の門衛、2人の穀粉製造係りの粉挽女、1人のアガムの女、5人の男性聖歌僧、10人の女性聖歌僧、計35人の男女で構成されている。

ウンマにおいて神殿の所属員が知られるのは、別にニンイシナ神の場合がある。アマルシン6年の日付がある AAICAB I, 1, 1911-484 は、「ウンマにおけるニンイシナ神の財産」を記録し、次のようになっている。

「集積所に置かれた420ゲルの大麦、1頭のメスの成牛、6頭のオスの成牛、1頭のメスの幼牛、180匹の各種の羊、120匹の各種の山羊、60ゲルの大きさの舟1艘、1人のグダ神官、1人のパン造り人、1人のビール醸造人、1人の穀粉製造の粉挽女、1人の草運び人、1人の粉挽き女、1人の女の門衛、1人の前庭清掃人・アガム、1人の直営地耕作人、3人の耕作牛係り、1人の牧夫、2人の牧夫補佐、1人の船頭」

ニンイシンナ神が所有する牛は耕作用であり、1人の直営地耕作人と3人の耕作牛係が、これらの牛を使って直営地の耕作に従事した。ウンマにおける直営地の耕作は、地区に分かれた耕作集団が担当しており、神殿が関与するのは例外的事象である<sup>(13)</sup>。耕作人を除けば、グダ神官を筆頭に、神の日常生活を支える品々を準備する人々によって構成されるという点で、アマルシンの組織と同等である。

新しく作られたアマルシン神殿が、都市神シャラをはじめとするウンマの諸神殿のなかでどのような地位にあったのか。それを知る手がかりとして、定期奉納の大麦量を比較したい。YOS 4, 260 は、倉庫長から支出された諸神殿への定期奉納の一日当たり的大麦量を記録している (sá-dug<sub>4</sub> dingir-re-ne ù šà-gal anše-[bar-an], u<sub>4</sub>-l-kam ki ka-gur<sub>7</sub>-ta)。記録順でなく、都市神シャラとその妻神ニンウルラを筆頭において、以下は大麦量の多いもの順に並べると次のようになる。単位はシラである (前田1997)。

368 1/6	<sup>d</sup> šára-umma <sup>ki</sup>	20	<sup>d</sup> nin- <sup>d</sup> da-lagaš <sup>ki</sup>
76	<sup>d</sup> šára a-pi <sub>4</sub> -sal <sub>4</sub>	17 1/2	<sup>d</sup> nin-sún
42	<sup>d</sup> šára ki-an	15 1/2	<sup>d</sup> nin-ildùm-ma
25 1/2	<sup>d</sup> šára anzumušen-bábbar	15	<sup>d</sup> nanše umma <sup>ki</sup>
57 1/2	<sup>d</sup> nin-ur <sub>4</sub> -ra umma <sup>ki</sup>	13	<sup>d</sup> nin-hur-sag gu-la
20	<sup>d</sup> nin-ur <sub>4</sub> -ra a-pi <sub>4</sub> -sal <sub>4</sub> <sup>ki</sup>	13	<sup>d</sup> en-líl
		10	<sup>d</sup> ka-uš-tab-tab
72	<sup>d</sup> amar- <sup>d</sup> suen	10	<sup>d</sup> nin-hi-li-sù
66	<sup>d</sup> šul-gi umma <sup>ki</sup>	7	<sup>d</sup> nin-SAR
56 1/2	<sup>d</sup> inanna zābalam <sup>ki</sup>	7	<sup>d</sup> nin-zābalam <sup>ki</sup> a-pi <sub>4</sub> -sal <sub>4</sub> <sup>ki</sup>
45	<sup>d</sup> en-ki	5	<sup>d</sup> ašnan
43	<sup>d</sup> nin-e <sub>11</sub> -e	4	<sup>d</sup> nin-é-gal
40	<sup>d</sup> gu-la umma <sup>ki</sup>	3 1/2	<sup>d</sup> šul-gi a-pi <sub>4</sub> -sal <sub>4</sub> <sup>ki</sup>
36	<sup>d</sup> nin-ib-gal	2 1/2	<sup>d</sup> šul-gi anzu.mušen-bar <sub>11</sub> -bar <sub>11</sub>
30	bára-gir <sub>13</sub> -gis <sup>ki</sup>	1 1/2	<sup>d</sup> šul-gi šà é-šára (umma <sup>ki</sup> )
21	<sup>d</sup> nun-gal		

大麦量の比較において最大の特徴を挙げるならば、第1位と第2位がウンマ市区とアピサル地区のシャラ神殿で占められ、支給大麦全体の約4割をこの2神殿が消費することである。とりわけウンマ市区にあるシャラ神殿への定期奉納が、第2位に対して5倍弱という、他を圧する量である。主神殿であるウンマ市区のシャラ神殿の巨大さと優位性が推測される。

諸神殿の中で、アマルシンの神殿に支給される大麦量72シラは、ウンマとアピサルのシャラ神殿に次いで第3位であり、シャラ神に次いで重要なニンウルラ神も、さらに王朝を隆盛に導いたシュルギの第4位をも凌駕する。この記録が書かれた日付は、アマルシン9年11月である。この年の2月にはアマルシンは死亡して (前田1999)、後継者たるシュシンが越年して正月に即位するまでの期間に書かれたので、量の多さはアマルシンを祭ることが重視された結果であるとも考えられるが、いずれにしても、シュルギとアマルシンの王の神殿が、ウンマにおいて重要な地位



を占めていたことは確かである。

神への供え物やその他の日常活動を支える穀物や穀粉は定期奉納 (sa<sub>2</sub>-dug<sub>4</sub>) として支給された。アマルシンの定期奉納について、受領者と支出者をまとめたのが次の表である。表中#は、印章が捺されていることを示す。

sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> - <sup>d</sup> amar- <sup>d</sup> suen	受領者	支出者	文書
AS 6 vi	lugal-ba-ra-ab-è#	ir <sub>11</sub>	YOS 4, 109
AS 6 vi	a-kal-la	< >	BIN 5 48
AS 6 vii	a-kal-la#	ir <sub>11</sub>	TYBC 955
AS 7 x	ur-nigin-gar#	lú- <sup>d</sup> šul-gi-ra	AAICAB I, 1, 1911-180
AS 8 vii	ur-nigin-gar#	lú- <sup>d</sup> šul-gi-ra	NSTROM 2, 97
AS 8xi	ur-nigin-gar#	lú- <sup>d</sup> šul-gi-ra	BRM 3, 88
[ ]	ur-gi <sub>6</sub> -par <sub>4</sub>		AnOr 1, 279
[SS?]	ur-ša <sub>6</sub> -ša <sub>6</sub> (= sá-dug <sub>4</sub> <sup>d</sup> nun-gal?)		
	ur-gi <sub>6</sub> -par <sub>4</sub>		
	a-kal-la	< >	MVN 18, 329
	lugal-ba-ta-ab-è		
(SS ?)	<sup>giš</sup> dúr-gar-ni		
	šeš-kal-la	< >	Nik 2,273
SS 1 ii	a-kal-la	< >	AAICAB I, 2, 1937-80
SS 1 iii	a-kal-la	< >	NSTROM 2, 99
SS 3 i	a-kal-la	< >	TYBC 1356
SS 5	é-ki-bi#	ka-gur <sub>7</sub>	MVN 3,269
SS 5 ix	ur-gi <sub>6</sub> -par <sub>4</sub> #	ka-gur <sub>7</sub>	TYBC 1618
SS 6	ur-tar-luh#	ka-gur <sub>7</sub>	TYBC 1776
SS 7 iv-xii	al-la#	ka-gur <sub>7</sub>	NSTROM 2, 098
IS 3	ur-gi <sub>6</sub> -par <sub>4</sub>	* <sup>d</sup> šara-i-zu	TCNSU 468

受領者について、アマルシンの所属員組織で確認した職名も加えて、アルファベット順に並べる。

a-kal-la	a-kal-la/ guda <sub>4</sub> <sup>d</sup> šara/ dumu ur- <sup>d</sup> [ ]/	= muhaldim
al-la dumu ur-ur	lú- <sup>d</sup> šara/ dumu ur-[ <sup>giš</sup> gigir]/ išib <sup>d</sup> šara/	
<sup>giš</sup> dúr-gar-ni		
é-ki-bi	é-ki-bi/ dumu a-a-kal-la/ guda <sub>4</sub> <sup>d</sup> šara/	= guda <sub>4</sub>
lugal-ba-ra-ab-è	lugal-ba-ta-è/ dumu ti-gi <sub>4</sub> -mu/	= muhaldim
šeš-kal-la		
ur-gi <sub>6</sub> -par <sub>4</sub>	ur-gi <sub>6</sub> -par <sub>4</sub> / dumu su-tur/ lú [šem]/	= šem
ur-nigin-gar	ur-nigin-gar/ dumu lugal-gišgigir-re/ en dub-lá)/	= guda <sub>4</sub>
ur-ša <sub>6</sub> -ša <sub>6</sub>	(= sá-dug <sub>4</sub> <sup>d</sup> nun-gal?)	
ur-tar-luh	lú- <sup>d</sup> nin-[ur <sub>4</sub> -ra]/ dumu ur- <sup>d</sup> nin-[ ]/ lú-šem/	

定期奉納受領者について、「グダ神官とされる例が多いが、išib, šabra, nar, ninda-du<sub>8</sub>, lú-bappir, šem などの職名が現れる。その中でも ninda-du<sub>8</sub>, lú-bappir, šem などパン製造・醸造関係者が多い。穀物からビールやパンを製造するという実際の作業に従事するものたちが主に受領者になっていたのである」と指摘したことがあるが (前田1997)、当然、アマルシンの定期奉納でもその点は

同じである。

問題は、アカルラが、円筒印章銘ではシャラ神のグダ神官となっており、先に指摘したように彼は料理人 (muḫaldim) であったと考えられることである。現時点では、グダ神官職にあって、料理人の役割を果たしていたと考えておきたい。このアカルラの子がエキビであろう。エキビの印章銘は「シャラ神のグダ神官であるアアカルラの子」であり、彼は「アマルシンのグダ神官」を名乗っている (Or 47/49, 370)。

<sup>gis</sup>dúr-gar-ni, šeš-kal-la, ur-ša<sub>6</sub>-ša<sub>6</sub>については、アマルシンの定期奉納の受給者として各々1例しか無く、職種等不明な点が多い。とりわけ、ur-ša<sub>6</sub>-ša<sub>6</sub>は、ヌンガル神の定期奉納の受領者として同名の者がおり、彼をアマルシンの定期奉納受給者の一人とする MVN 18, 329は、ウルシャシャの後に書くべき「ヌンガル神の定期奉納」を書き落とした可能性がある。

アマルシンの定期奉納受領者ウルゲパルは、スルトゥルの子とする印章を捺す。この印章は、駅亭の定期奉納の受領においても捺されている<sup>(14)</sup>。担当する組織を変更する場合もあったのだろう。

例を示してきたように、アマルシンの定期奉納受領者の印章銘を見ると、彼らはシャラ神のイシブ神官や、グダ神官を名乗っている。彼らは、ウルから派遣されてきた者ではなく、ウンマの都市神シャラに仕える者達であった。当然のことではあるが、ウンマのアマルシン神殿はウンマの諸神殿の一つであり、王都ウルや統一王権を担うウルの王の出先機関ではない。ウルの出先機関としては、別の ka-é-gal が機能していたと考えられる。

## おわりに

神たる王アマルシンの定期奉納は、他の神殿同様にウンマの穀物管理人から支給された。表にあるように、イル、ルシュルギ、倉庫長から支出され、イッビシン治世の例ではシャライズの会計で管理されている。イルは倉庫長 (ka-gur<sub>7</sub>) であり、彼の活動は、前任者ウルリシを引き継いでシュルギ33年からアマルシン6年までである。ルシュルギは、エンシであるウルリシの子であり、「ルエマフ、書記、ウンマのエンシであるウルリシの子 lú-é-mah-e dub-sar dumu ur-<sup>d</sup>li<sub>9</sub>-si<sub>4</sub> énsi umma<sup>ki</sup>-ka」の銘がある印章を使用した。彼の活動期間はアマルシン7年からシュシン1年までである。シュシン5年から7年にかけて、アマルシンの定期奉納は倉庫長から支出されているが、この倉庫長の名は記されていない。この時期の倉庫長としては、後にエンシになるグドウドウの可能性はあるが、彼とは別に、倉庫長イルの子であるシャライズも考えられる。イルの子シャライズの活動を、彼の円筒印章の使用で確認すると、シュシン6年からイッビシン3年までである<sup>(15)</sup>。彼が倉庫長の可能性があるにしても、シャライズもグドウドウも倉庫長であったとする文書は発見できないし、倉庫長という職名でのみ書き、なぜ人名を書かないのかを含めて、問題は解決しない。

倉庫長が誰であったかという未解決な部分を残すにしても、アマルシン神殿への定期奉納が、他の諸神殿同様、エンシを頂点とする行政経済組織に支えられて成り立つことは確かである。

注

- (1) その他に、ウンマ市区のシャラ神殿内にシュルギの像が置かれていた (YOS 4, 260: šul-gi šà é-<sup>d</sup>šára [umma<sup>ki</sup>])。
- (2) ウンマの都市神シャラのための神殿造営については、前田2008を参照。
- (3) Aleppo 480 (S 36 iii), MVN 9, 171 (S 44), NSTROM 2, 49 (S 45a i), TYBC 542 (S 47), TYBC 534 (S 47 i), MVN 21, 410 (AS 3 xiii), AnOr 1, 88 (AS 5), DTCR 109 (SS 1 vi).  
シュシン治世にイブガル神殿のグダ神官ルガルアジダが記録される (TYBC 1430)。別人であろう。
- (4) Aleppo 266: 1200 duš, é<sup>d</sup>šul-gi gub-ba, iti diri-àm, mu úš-sa é puzur<sub>4</sub>-da-gan ba-dù. seal: lú-<sup>d</sup>šára/ dub-sar/ dumu níḡ-du<sub>10</sub>-ga/ この文書を公刊した Touzalin は、1200<UN>-ÎL のように労働者ウンイルと解釈するが、ÎL = duš と読むべきである。
- (5) AAICAB I, 4, 376: 10 dug sá-dug<sub>4</sub> é<sup>d</sup>šul-gi dù-dè, ki lugal-ezem-ta, DUB ba-sig<sub>5</sub>. seal: ba-ša<sub>6</sub>-ga/ dumu gir-ni/ gal<sub>5</sub>-la-gal/.
- (6) YOS 4, 273: 800 sar sig<sub>4</sub> á-bi 1/2-ta, 825 guruš u<sub>4</sub>-l-šè, á-bi 7 sila-ta, é-<sup>d</sup>šul-gi-ra-ka gub-ba, gir ur-nigin-gar šidim, mu<sup>d</sup>nanna kar-zi-da. 必要人員は400人となり、825人の数がどのように算出されたかは不明である。
- (7) nin-tur-tur でなく、nin<sub>9</sub>-tur-tur と書かれる女性は、36人の女奴隷を有し、彼女のギルセガ (所属員組織) を維持し (CCTB 2, 296)、菜園も所有した (TCL 5 6166)。同一人物であろう。その他に、AAICAB I, 2, 1971-302; BIN 5, 327; Deimel, Or 15, IB 123; MVN 2, 317; TYBC 638 (S 22); Gomi, SANTAG 7, 53 (S 25 iv) に書かれた nin<sub>9</sub>-tur-tur も、ウルやニッブルに所在したりするので、同一人物と見なすことができる。
- (8) AAS 18: 5 guruš [ ], 1 guruš uru?-ta?-nu?-è?-a?, é-<sup>d</sup>šul-gi-ra-ka gub-ba, u<sub>4</sub> 15-šè. ki AB-na-a-ta, DUB ba-ša<sub>6</sub>-ga, itu<sup>d</sup>li<sub>9</sub>-si<sub>4</sub>. mu-ús-sa xx-a mu-ús-sa [ ]. seal: [ba-ša<sub>6</sub>-ga]/ dumu [gir-ni]/ gal<sub>5</sub>-lá-gal/.
- (9) UTI 6, 3712 (AS 5 vi) の後半に記録される u<sub>4</sub>-da gaba-ri-a は、主に耕地に関係する祭儀であるので、アマルシン神殿の造営とは直接関係しないと思われる。
- (10) MVN 13 760 (AS 6 vii): 36 guruš lú-d[a ], 1/2 sila kaš 1/2 sila ninda-Yta/, 216 <guruš> lú duš?, 1/2 sila kaš 1/ sila ninda-ta, 1 gú duh giš-i-ka, 0.0.3. ku<sub>6</sub>-NE, al-tar du<sub>11</sub>-lum(=ga), a-rá 20(= 2?)-kam, 45 guruš lú-da, 1/2 sila kaš 1/2 sila ninda-ta, 263 guruš lú duš?, 1/2 sila kaš 1/3 sila ninda-ta, 1 gú duh giš-i, 0.0.3. ku<sub>6</sub>-NE, al-tar du<sub>11</sub>-ga a-rá 30(=3)-kam, é<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen-ka, ki ur-<sup>d</sup>šul-pa-è[-ta], DUB énsi-ka.  
al-tar については、Farber 1989 を見よ。
- (11) itu ezem<sup>d</sup>amar-<sup>d</sup>suen: CTNMC 52; MVN 13 851; TCNSU 593; TYBC 931; TYBC 954; TYBC 983; Fales, Prima, n.15; SETDA 109; SETDA 110.
- (12) Snell, LP 10 は集計簿であり、アマルシン 7 年の 1 月から 7 月までの支出が記録されていると思われるが、木製くぎ用のアスファルト支出については、対応する文書 AnOr 1, 107 が、アマルシン 7 年の 7 月 (旧月表記) と明記するので、7 月の支出であることは確かである。
- (13) ニンイシンナ神はグラ神の別名であり、グラ神の直営地への関与については、前田2006参照。
- (14) sá-dug<sub>4</sub> kas<sub>4</sub> の受領者 ur-gi<sub>6</sub>-par<sub>4</sub>  
UTI 6, 3681 (SS 3), MVN 16 1231 (SS 5 xii) = seal, UTI 5, 3046 (SS 6 iv) = seal  
seal: ur-gi<sub>6</sub>-par<sub>4</sub> dumu su-tur/ lú [šem]/  
その他の定期奉納を受給するウルゲバルが同名異人であることは、印章銘から明らかになる。  
ur-gi<sub>6</sub>-par<sub>4</sub>/ dumu ur-<sup>d</sup>ištaran/  
sá-dug<sub>4</sub> <sup>d</sup>nin-ib-gal: NSTROM 2, 312 (S 27a x), MVN 21, 287 (S 33-35), MVN 3 142 (S 34 i), NSTROM 2, 132 (S 34 xi)=seal  
ur-gi<sub>6</sub>-par<sub>4</sub>/ dumu da-da/  
sá-dug<sub>4</sub> <sup>d</sup>šára: MVN 13 040 (AS 8 ii)=seal, AAICAB I, 3, 283 (AS 8 viii), MVN 13, 40 (AS 8 ii) = seal, AAICAB I, 3, 283 (AS 8 viii).
- (15) <sup>d</sup>šára-i-zu/ dub-sar/ dumu ir<sub>11</sub> ka-gur<sub>7</sub>-ka/: MVN 13, 353 (SS 6) ~ TYBC 1995 (IS 3).

## 略号

RIME: The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods. Tronto

RIME 1: D.R. Frayne, *Presargonic Period (2700-2350 BC)*, Tronto, 2008

RIME 3/1: D.O. Edzard, *Gudea and his dynasty*, 1997

RIME 3/2: D.R. Frayne, *Ur III Period*, 1997

ウル第三王朝時代の行政経済文書の略号については Sigrist & Gomi 1991を参照のこと。それ以後の史料については、次のような略号を使用する。

AAICAB: Grégoire, J.-P., *Archives administrative et inscriptions cunéiformes de l'Asmolean Museum et de la Bodleian Collection d'Oxford*, I: 1-4, Paris, 1996-2002.

BCT: P.J. Watson, *Catalogue of Cuneiform Tablets in Birmingham City Museum*. (Birmingham: Cuneiform Tablets), Warminster.

Vol.2: *Neo-Sumerian Texts from Umma and other sites*, 1993.

BPOA 1-2: T. Ozaki & M. Sigrist, *Ur III Administrative Tablets from the British Museum*, 1-2, (Biblioteca del Proximo Oriente Antiguo 1-2), Madrid 2006.

BPOA 6: M. Sigrist, T. Ozaki, *Neo-Sumerian Administrative Tablets from the Yale Babylonian Collection*, Part 1, Madrid, 2009.

DTCR: M. Sigrist, *Documents from Tablet Collections in Rochester*, Bethesda, 1991.

MVN 18: M. Molina, *Tablillas Administrativas Neosumerias de la Abadía de Montserrat*, Rome, 1993.

MVN 21: N. Koslova, *Neusumerische Verwaltungstexte aus Umma aus der Sammlung der Ermitage zu St. Peterburg-Rußland*, Rome, 2000.

NSTROM: M. Sigrist, *Neo-Sumerian Texts from the Royal Ontario Museum*, 1-2. Bethesda 1995-2004.

Owen JCS 52: OWEN, D.I. & E. Wasilewska, Cuneiform Texts in the Arizona State Museum, Tucson. *Journal of Cuneiform Studies* 52 (2000), 1-53.

SANTAG 6: N. Koslova, *Ur III-Texte der St. Peterburger Eremitage*, Wiesbaden 2000.

SANTAG 7: T. Ozaki, *Keilschrifttexte aus japanischen Sammlungen*, Wiesbaden 2002.

TYBC: M. Sigrist, *Texts from the Yale Babylonian Collections*, 2 Pts, Bethesda 2000.

UTI: Yildiz, F. & Gomi (Ozaki) Tohru, *Die Umma-Texte aus den Archäologischen Museen zu Istanbul*, Band 3-6 Bethesda, 1997-2001.

## 参考文献

Frankfort H.A. 1940: H.A. Frankfort, et al. *The Gimil-Sin Temple and the Palace of the Rulers at Tell Asmar*, Chicago.

Gelb I.J. 1976: "Homo ludens in early Mesopotamia," *Studia Orientalia* 46, 44-45.

Maekawa K. 1999: The "Temples" and the "Temple Personnel" of Ur III Girsu-Lagash," in K. Watanabe (ed.), *Priests and Officials in the Ancient Near East. Papers of the Second Colloquium on the Ancient Near East - The City and its Life held at the Middle Eastern Culture Center in Japan, March 22-24, 1996* -, Heidelberg 1999, 61-102.

Moorey P.R.S. 1982: *Ur 'of the Chaldees'*, Cornell University Press (L. ウーリー, P.R.S. モーレー [森岡妙子訳]『カルデア人のウル』みすず書房1986).

Sigrist M, & T. Gomi 1991: *The Comprehensive Catalogue of Published Ur III Tablets*, Bethesda.

Steinkeller P. 1987: "The Foresters of Umma," in M.A. Powell (ed.), *Labor in the Ancient Near East*, New Haven, 73-115.

前田徹 1997: 「ウル第三王朝時代のウンマにおける神殿への奉納」『早稲田大学文学研究科紀要』42/4, 39-55.

前田徹 1999: 「シュメールにおける王権の象徴—王状、王冠、玉座」『早稲田大学文学研究科紀要』44/4, 21-30.

前田徹 2000: 「ウル第三王朝時代ウンマの文書管理官 GA<sub>2</sub>-dub-ba」『早稲田大学文研紀要』45/4, 17-31.

前田徹 2004: 「ウル第三王朝時代ウンマにおける sa<sub>2</sub>-dug<sub>4</sub> za<sub>3</sub>-mu」『オリエント』46/2, 249-251.

前田徹 2006 : 「シュメールにおける統一王権と都市支配者」 (平成15～17年度科学研究費補助金 [基盤研究C一般] 研究成果報告書 研究代表者 前田徹).

前田徹 2008 : 「ウル第三王朝時代ウンマにおけるシャラ神殿造営」『早稲田大学文学研究科紀要』53/4, 33-44.